

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の1年目)

1. 研究課題

環境問題の社会史的研究

Studies on the Social History of Environmental Problems

2. 研究代表者氏名

岩城 卓二

Iwaki Takuji

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(1年目)

4. 研究目的

日本の近世は、生産・生活の場の拡大と、天然資源の獲得のために山野河海を切り開く大開発の時代であった。開発による諸産業の勃興は経済的発展をもたらしたが、他方でそれらに起因する環境問題が発生し、社会問題化していたことは、各地に残される近世史料から知られる。しかし、その多くは一地域内の問題に止まり、環境問題が人の健康や生活環境に関わる公害として大きな社会問題となるのは1950年代以降のこととされる。近世以降、人々は環境問題に対してどう向き合ってきたのか。そこで本研究班では、日本の近世から現代までの環境問題について、とくに環境問題に対する民衆運動・社会運動に注目し、運動が起こった現場の社会構造をふまえて環境問題を考えていきたい。あわせて、世界で発生した環境問題をめぐる民衆・社会運動と比較検討し、被害の現場に生きる住民にとって環境問題とは何かを明らかにしていく。

Early modern Japan was an era of great development but also saw an expansion of production and human living space that resulted in the devastation of nature. Although the rise of various industries brought economic growth, historical sources show that it also caused various environmental problems which are now also recognized as social problems. However, most problems did not spread beyond local communities until the 1950s, when they finally began to be recognized as serious social crises, called *kōgai*, which critically affected public health and destroyed the living environment. How, then, have people confronted such issues throughout history? This research project will explore various environmental problems from the early modern period through to contemporary times, focusing on the social movements and social structures that framed them. We also plan to compare

environmental problems in Japan with those encountered in other countries, aiming to clarify the significance and]meaning of such problems for the people living with disaster.

5. 本年度の研究実施状況

本年前半は、新型コロナウイルスの感染拡大及び緊急事態宣言の発令により対面型の研究会が開催できなくなったため、当初予定よりも開始が遅れたが、6月よりZoomによる研究会を開始した。本年は、日本近世・近代史を専門としつつも古気候学や民俗学・地質学など学際的な視野から研究を進めてきた気鋭の研究者による報告を軸に、日本史のみならず中国史・西洋史、更には文化人類学・哲学など多様な参加者による活発な議論が展開された。本年はこれに加えて、人文研研究班では初の試みである、Zoomによる研究会の録画も行った。

6. 本年度の研究実施内容

- 2020-06-13 近世の河川・堤防・新開 発表者 市川秀之 滋賀県立大学
- 2020-06-22 近世日本の気候変動を考えるー異分野融合研究で日本史を捉え直すためにー
発表者 鎌谷かおる 立命館大学
- 2020-07-13 近代日本の環境に関する専門的知識と足尾鉍毒事件 発表者 ピッテル・シリ
アン フランス国立極東学院京都支部
- 2020-11-09 日記史料からみた山間部の生業と家族・社会関係ー『鉄五郎日記』を題材と
して 1921～1941ー 発表者 沼尻晃伸 立教大学
- 2020-11-16 森と火と環境論ー帝国日本と科学的林業をめぐるー 発表者 米家泰作 京
都大学文学研究科
- 2020-12-07 こどもを喰う川ー都市環境汚染と隔てて保つ衛生・安全 発表者 関礼子 立
教大学
- 2020-12-21 鉄山・銅山の「ゴミ」ー鉄屎・緑青・灰毒からみる近世社会ー 発表者 岩城
卓二 京都大学人文科学研究所
- 2020-02-01 「自然環境」と「野生」のはざままで：近代プロジェクトとしての開発と自然
保護をめぐる問題 発表者 石井美保 京都大学人文科学研究所
- 2020-03-08 幕末期の炭鉍開発と幕府のエネルギー政策 発表者 高久智広 神戸市立博物
館
- 2020-03-29 近世東北の鉄生産と森林・河川ー仙台藩領を事例としてー 発表者 高橋美貴
東京農工大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岩城卓二、小関隆、高木博志、石井美保、KNAUDT, Till、瀬戸口明久、平岡隆二、福家崇洋、藤原辰史、池田さなえ

学内

石川 登(東南アジア地域研究研究所)、ERICSON Kjell David 学際融合教育研究推進センター)、Andrea Flores Urushima(東南アジア地域研究研究所)、土屋由香(人間・環境学研究科)、山越言(アジア・アフリカ地域研究研究科)

学外

井黒忍(大谷大学)、Holca Irina(東京大学大学院総合文化研究科)、岡安裕介(NPO 法人京都アカデミア)、河野未央(尼崎市立地域研究史料館)、鎌谷かおる(立命館大学)、唐澤太輔(秋田公立美術大学大学院)、斎藤幸平(大阪市立大学大学院)、佐野静代(同志社大学)、高久智広(神戸市立博物館)、武井弘一(琉球大学)、田中雅一(国際ファッション専門職大学)、友松夕香(愛知大学)、朴美貞(立命館大学)、橋本道範(滋賀県立琵琶湖博物館)、松嶋健(広島大学大学院)、松村圭一郎(岡山大学大学院)、松本望(尼崎市立地域研究史料館)、青木聡子(名古屋大学情報文化学部)、河島裕子(尼崎市立歴史博物館あまがさきアーカイブズ)、ピッテル・シリアン(フランス国立極東学院京都支部)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)		15	3	1	1	0	99	19	15	11	
		(4)	(1)	(1)	(1)	(0)	(30)	(3)	(11)	(6)	
国立大学		5	1	0	0	0	24	3			
		(1)	(1)	(0)	(0)	(0)	(9)	(3)			
公立大学		2	0	1	1	0	9		3	3	
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
私立大学		9	1	0	0	0	24	5			
		(6)	(1)	(0)	(0)	(0)	(14)	(5)			
大学共同利用機関法人		0	0	0	0	0					
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
独立行政法人等公的研究機関		5	0	0	0	0	21				
		(2)	(0)	(0)	(0)	(0)	(12)				
民間機関		1	0	0	0	0	1				
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)				
外国機関		1	1	0	0	0	2	2			
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)			
その他		0	0	0	0	0					
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)					
計	0	38	6	2	2	0	180	29	18	14	0
		(13)	(3)	(1)	(1)	(0)	(65)	(11)	(11)	(6)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	5		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	23		4	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載論文数	掲載年月日	論文名	発表者名
新修豊田市史編さん専門委員会編『新修豊田市史12 資料編 近代Ⅲ』	1	R2. 3	第五章 山と生業 第一節 山の管理 一 御料林、同解説	池田さなえ
大嶋えり子, 小泉勇人, 茂木謙之介編著『遠隔でつくる人文社会学知—2020年度前期の授業実践報告—』LP 雷音学術出版	1	R2. 10	京都大学「ILASセミナー：近現代日本における「病」の歴史	池田さなえ
豊田市史研究	1	R3. 3	御料林経営と民有下戻し—現豊田市域の事例を中心として	池田さなえ
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	過去を生きる「病む身体」—病をめぐる学生との対話の記録から	池田さなえ

岩城卓二、石井美保、田中祐理子、藤原辰史編著『環世界の人文学』人文書院	1	R3. 3	震災後文学の動物と書き直し—中森明夫、川上弘美、古川日出男のテキストを中心に—	ホルカ イリナ
Irina Holca, Carmen Sapunaru Tamas, Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	1	R2. 5	Home Is Where Mother Is, and the Way to a Man's Heart Goes through His Stomach: Bodies in the Kitchen (Yoshimoto Banana)	ホルカ イリナ
濱西栄司・鈴木彩加・中根多恵・青木聡子・小杉亮子『問いからはじめる社会運動論』有斐閣	1	R2. 6	なぜ成功・失敗する？どのように影響を与える？——ドイツの原子力施設反対運動から	青木聡子
荒武賢一郎・野本禎司・藤方博之編『古文書が語る東北の江戸時代』（吉川弘文館）	1	R2. 11	山林資源と仙台藩 - 一八世紀前半の史料と事例から -	高橋美貴
筒井清忠編『昭和史講義 戦後篇・下』筑摩書房	1	R2. 8	公害・環境問題の展開	小堀聡
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	炭坑化する世界——空気を満たすテクノロジー	瀬戸口明久
史学雑誌	1	R2. 6	消費論からみた中世菅浦	橋本道範
Kawanabe, H., Nishino, M. & Maehata, M. (eds.), Lake Biwa: Interactions between Nature and People: Second Edition, Springer, Dordrecht	1	R2. 8	History of Funazushi, Fermentated Fishes from Lake Biwa.	MICHINORI HASHIMOTO

石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	地域環境史の自然観論—琵琶湖産フナ属のコード化をめぐる	橋本道範
人と環境とコミュニケーション—災害の記憶と履歴化	1	R2. 11	学術の動向	関礼子
応用社会学研究	1	R3. 3	「ふるさと剥奪」と「ふるさと疎外」	関礼子
松本卓也・武本一美『メンタルヘルスの理解のために—こころの健康への多面的アプローチ』ミネルヴァ書房	1	R2. 4	日本の文化と心の病い—柳田國男の視点より	岡安裕介
『こころと文化	1	R2. 10	文化精神医学考—柳田國男に導かれて	岡安裕介
精神医学史研究	1	R2. 11	日本人の再生観と湯治文化	岡安裕介
石井美保、岩城卓二、田中祐理子、藤原辰史編『地球危機時代の人文学—生・環境・文化をめぐる歴史と理論』人文書院	1	R3. 3	神・米・靈魂—柳田國男と折口信夫の循環論	岡安裕介
現代思想	1	R2. 8	イタリアにおける医療崩壊と精神保健—コロナ危機が明らかにしたもの	松嶋健
KOREA TODAY	1	R2. 6	多文化社会韓国を診断する—濟州の外国人移住政策と韓国社会の病	朴美貞
KOREA TODAY	1	R2. 5	私は王でござる—在日に刻む王利鎬の歩み	朴美貞

大谷学報	1	R3.3	生み出される「公」の水-伝統中国における水をめぐる認識とその変容	井黒忍
経済科学	1	R3.3	高度成長期日本の原子力政策：軽水炉導入とナショナル・プロジェクト創設	小堀聡
筒井清忠編『昭和史講義 戦後篇・下』筑摩書房	1	R2.8	公害・環境問題の展開	小堀聡
Geographical Review of Japan Series B	1	R3.3	Japanese Colonial Forestry and Treeless Islands of Penghu: Afforestation Project and Controversy over Environmental History. , forthcoming	Komeie Taisaku
Liu T-j and Muscolino, M. S. (eds). Perspective on Environmental History in East Asia: Changes in Land, Water and Air. Routledge.	1	R3.3	Devastation and Indigenous People in Colonial Forestry: Representations of Taiwanese and Korean Vegetation Change in the Japanese Empire	Komeie Taisaku
地理歴史人類学論集	1	R3.3	元禄期の凶作・飢饉と能登奥郡	武井弘一

共同利用・共同研究による成果として発行した研究書

研究書の名称	編著者名	発行年月	出版社名
Forms of the Body in Contemporary Japanese Society, Literature, and Culture	Irina Holca, <u>Carmen Sapunaru</u> <u>Tamas</u>	R2.5	Rowman& Littlefield
人新世の「資本論」	斎藤幸平	R2.9	集英社
はみだしの人類学 ともに生きる方法	松村圭一郎著	R2.4	NHK 出版
クローズする眼差しー欧米と極東の朝鮮半島（在日記録シリーズ2）（仮）	王清一・朴美貞	R3.3	えにし書房
肖像の政治学（仮）	朴美貞	R3.3	えにし書房

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由なし

12. 次年度の研究実施計画

研究実施計画3年目のうち2年目にあたる2021年度は、2020年度と同じく、月2回(8~9、1~2月除く)のペースで研究会を開催する。4~7月は、歴史学・文化人類学を中心とした具体的事象に基づく個別研究報告、10月以降は、これに加えて文学・哲学・経済思想を中心とした理論的な個別研究報告を予定している。2020年度の成果をふまえ、前近代人の自然観、開発と自然災害の因果関係、生業と環境問題についての検討を深める予定であるが、とくに日本社会で環境が社会問題化する過程について、国内の社会的状況の検討と合わせて、世界の諸国・諸地域の事例と比較しながら検討していきたい。また、COVID19の感染状況が改善されれば、当初の計画通り、環境問題が社会問題化する背景や争論・訴訟の内容が知られる近世・近代史料の収集や、公害問題の現場の調査も行う予定である。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費(延べ)	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	10	30	300000
	一般旅費			
海外旅費	渡航旅費			
	招へい旅費			
謝金(講演謝金、研究協力者金、その他の謝金)				50000
消耗品等経費				50000
その他				
合計				400000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

班員各自が、研究班における個別研究報告・討論の成果を研究論文として公表するとともに、今後の共同研究の方向性を再調整する計画である。これらを通じて最終年度の成果公開の準備していく予定である。